

日本語の項省略と「名詞句の同一指示性の識別」

久好孝子

要 旨

本稿は、日本語の書き言葉の項省略を「名詞句の同一指示性の識別」という視点から考察するものである。談話内で、述部の要求する第1項がどのような形式で表現されているかを確認し、それを基に、項省略との相関が指摘されている条件を統計的に分析し、その妥当性を検証していく。その結果、日本語の第1項省略には、「単一語彙項の制約」と「他動詞の主語」、「同一指示性」と「有生性」といった通言語的要因が関与していることを提示する。独自で構築したコーパスを用いて、項解釈の決定要因を数量的に検証する。

キーワード：項省略、名詞句の同一指示性の識別、単一語彙項の制約、有生性

1. はじめに

日本語は、英語に比べ「項省略 (argument ellipsis)」の頻度が高いといわれており、とりわけ、(1 a) のように第1項 ϕ_i の省略頻度が顕著である。

(1) a. それで ϕ_i (=1^②) 寝室に引き上げてからも ϕ_i 眠りにつけないまま ϕ_i いろいろ考えているうちに、一方では神経がつかれているのでもあり、寂しくガランドウの場所に、 ϕ_i ひとりで立っているという恐ろしい夢が始まりそうになった。 (静かな生活)

b. I_i thought about all sorts of things, and with frayed nerves, I was seized by the premonition of a terrible dream, a night mare in which I_i saw myself_i ϕ_i standing all alone in and empty, desolate place. (A quiet life)

さらに、日本語と英語は、省略頻度だけでなく、省略項と先行詞の位置関係にも違いがある。(1 b) では、欠けている項と同一の指示対象を表す形式が、文内 (intrasentential) にあるが、(1 a) では文内には見当たらない。日本語の項省略の解釈には、複数の文にわたった (intersentential) 談話情報が必要となる。このような項省略に関しては、談話文法の観点から多くの研究が行われ、有益な知見が蓄積されてきた (久野 1983, 砂川 2005 他)。しかし、これらの研究は、分析対象の談話の量が限定的であり、言語の使用と要因の相関性が言及されていないなど、検証する余地が残されているように思われる。

私たちがことばを使って何かを言い表そうとするとき、名詞句を使って指示対象を示し、動詞句など用いて叙述を行う。言語にとって「指示 (reference) と述部 (predication)」は最も重要な機能であり、この単位 (節) を基準に事象をコード化し、それを積み重ねて談話を構成している。これまでの研究では、談話の基本単位である節を対象にしてその振る舞いや内部構造、そしてそれぞれの要素の関連性を扱ったものはほとんどない。談話がどのように構成されているかを分析するため

には、談話全体を見渡す視点と談話の最小単位である個々の節に注目する視点を合わせもつ必要があると思われる。そこで、本研究は、談話内で個々の節がどのような形式・意味機能をもっているかを確認するとともに、それぞれの節が隣接の節とどのように連続しているかも検証し、個別的で包括的な分析をめざしていく。

本研究は、談話内の「指示と述部」の使われ方を分析するが、「指示」のうち「第1項」の位置に生起する指示を中心に扱う。(1a)のような項省略を項のコード化の全体の中で捉えなおし、そこに関与すると思われる要因とその妥当性を検証していく。使用頻度の数量分析を通し、項省略とその起頻度を左右すると思われる要因との関連性を検証し、第1項が最も省略されやすい場合の動機付けを考察していく。

世界の多くの言語には、談話内で連続して名詞句に言及するとき、「名詞句の同一指示性の識別(reference-tracking)^③」という機能が備わっているといわれており(Van Valin & LaPolla 1997)、談話内の「指示と述部」の使用を分析するにあたっては、この概念は有効と考えられる。言語形式の分布を確認し、多言語間に共通して見られる要因である、節構造における「単一語彙項の制約(one lexical argument constraint)」、指示対象の、項の文法関係(特に「他動詞の主語」、前の節の主語と同一かそうではないのかを示す機能的要素である「同一指示性(coreferentiality)」や意味要素である「有生性(animacy)」に着目して項の振る舞いを包括的に考察していく。

本稿の構成は以下のとおりである。2節では、「名詞句の同一指示性の識別」の概念と先行研究を紹介し、項省略に関与する要因を提示する。次に、3節は、独自で構築したコーパス^④の説明と研究方法を説明する。4節では、質的・数量的な分析を行った分析結果を述べ、最後に5章で、本研究の結論と今後の展望を示す。

2. 「名詞句の同一指示性の識別」と先行研究

2.1. 「名詞句の同一指示性の識別」

言語には、談話内で連続して名詞句に言及するとき、その名詞句の同一性を保障するための機能があり、言語類型論ではそれを「名詞句の同一指示性の識別」と呼んでいる。代表的なものには、「交替機能」と「交替指示」がある(Comrie 1989:37)。交替機能とは、同じ指示対象を連続して言及していることを示す仕組みのことで、日本語の文法範疇では受動態が同じような働きをしている。

(2) [CL1 ϕ_i (=当時の日本人)[動作主]贅沢をすると][CL2 幕府に ϕ_i [受動者]怒られて (受動態)][CL3 ϕ_i 財産没収などの罰を受ける] ^⑤ (12人)

(2)の第1節と第2節を見ると、「当時の日本人」の意味役割が動作主と受動者とで異なっている。受動態の機能の一つとして、このような意味的な変化を示すことができる(Van Valin & LaPolla 1997:291)。連続する節の間の指示対象の同一性を保障しつつ、意味要素の変化を示すのが、交替機能の役割である。一方、「交替指示」とは、接続した2つの節の主語が同じなのか(SS=same subject)、それとも違うのか(DS=different subject)を文法的な手段(多くは動詞まわりの接辞)によって標

示するシステムである^⑥。

項の指示対象をどのような形式で表現するのか（省略なのか具現化なのか）といった項のコード化には、指示対象が何であるかを示すための情報や仕組みが内包されているはずである。よって、項省略という現象を把握し解明するためには、「名詞句の同一指示性の識別」という視点からの考察が必要であると考えられる。

2.2. 先行研究

日本語の項省略を名詞句の同一指示性の識別という観点から考察したものに、Fry (2003)、Bekeš (1995)、Nariyama (2003) がある。まず、Fry (2003) は、自然会話のコーパス Call Home Japanese の分析を通して、DuBois (1987) の提案する「単一語彙項の制約」と Comrie (1989) が挙げる「他動詞の主語は省略されやすいという一般化」を支える結果を提示している。単一語彙項の制約とは、話し言葉に適応される制約で、言語間に普遍的にみられるといわれており、1つの節内で項の数はゼロか1が基本で、節1つに対して項が2つ以上出現することは回避されるという制約である。これは、新情報を担った項がどのような文法関係で言語化される場合が多いかということに関連するもので、語用論と文法現象の相互関係を指摘した点で注目を浴びている制約である。

次に、Bekeš (1995: 167) は、同じ指示対象に言及する際の「主題らしさ」に着目し、「ハ」を伴う名詞句と格助詞を伴う名詞句、および省略項の分布を確認し、主題らしさの指標の1つである短い「指示距離」が直接関与するのは省略項であると結論づけている^⑦。

最後のNariyama (2003) は、書き言葉を対象に省略項と述部、そして「有生性/人間性」に着目し、日本語は1人称が述部に構造化されているので表面上で1人称を具現化する必要がないと主張している (Nariyama 2003: 246)。また、項省略と「ハ」と「ガ」の使い分けを交替指示と関連づけて議論している。

以上、3つの先行研究をまとめると、名詞句の同一指示性の識別には、「単一語彙項の制約」と「他動詞の主語」、「同一指示性」、「有生性」の4つの要因が関与していると考えられる。そこで、本研究では第1項の省略とこの4つの要因との関連性を、(3)に示すような5段階の手順で検証することにする^⑧。

- (3) a. 「指示」に現れる形式の分布、および頻度の確認
- b. 「述部」に現れる形式および「指示」との組み合わせの確認
- c. 「指示」の文法関係の確認
- d. 「指示」の機能的要因の確認
- e. 「指示」の意味的要因の確認

4つの要因との関連性を検証する前提として、まず、談話内での項の形式の分布から項省略の頻度を確認する(3a)。次に、「単一語彙項の制約」の妥当性を確認し、どのような組み合わせの「指示」と述部が好まれているのか、項省略とはどのように関連しているのかを示す。さらに、(3c)から(3e)では、「他動詞の主語」「同一指示性」「有生性」といった統語的・意味機能的な条件が項

省略にどのように関与しているかを検証していく。次節では、本稿で扱った言語資料をもとに具体的な分析方法を示していく。

3. コーパスと分析方法

3.1. コーパス

本研究は、複数の節間での指示対象の同一性を分析することを目的としているため、対象テキストには1文内の語数や節の数が多く、複文の出現頻度が高いものが適切だと判断し、書き言葉のテキストを選択した。さらに、検証要因である「単一語彙項の制約」は、話し言葉にのみ適応されるといわれており、書き言葉に関する考察は管見の限り見当たらず、書き言葉の分析は有益であると思われる。また、本研究で使用した書き言葉のコーパスには、韓国語・英語の対訳があり、本研究の結果を基にした対照研究も可能になる。考察の目的に対する適合性と研究の発展性を鑑み、分析対象を対訳のある書き言葉とした。

次に、コーパスの分量であるが、本研究では、1作品から一部抽出したデータを用いた。1つの作品のうち2000語程度でその作品の「代表性(representativeness)」を表すことができるといわれており(Kennedy 1998:69)、本研究でもこの代表性という概念を援用し、1作品全体を対象にするのではなく、ある程度まとまった分量のデータを一部抽出して分析対象にした。

次に、日本語の項省略を検証する際の適切な分量であるが、まず、1作品(『火車』)から2,000字程度を抽出して第1項の形式分布を確認し、次に、その対象範囲を4,000字程度にまで広げて分布を確認してみた。すると、表1のような結果が得られた。2,000字程度の談話の省略項は、109件で全体の61.9%にあたり、4,000字程度の談話の省略項の63.3%(212件/335件)との差は1.4%にとどまっており、談話の量を2倍に増やしても省略項の頻度に著しい変化は見られず、第1項の他の形式分布に関しても、2,000字程度と4,000字程度で際立った違いがみうけられないことがわかる。よって、談話の分量は1作品につき2,000字から4,000字程度の範囲のものを使用した。具体的には、『甘えの構造』は4,673文字(289節・83文)、『日本を創った12人』は4,229文字(265節・113文)、『単一民族神話の起源』は2,124文字(165節・44文)、『黒い雨』は4,495文字(338節・112文)、『静かな生活』は4,356文字(278節・91文)、『火車』は4,667文字(335節・119文)である。

表1 文字数による項形式の分布の比較

	2,000字		4,000字	
	数	割合	数	割合
省略項	109	61.9%	212	63.3%
語彙名詞	56	31.8%	98	29.2%
その他	11	6.3%	25	7.5%
合計	176	100%	335	100%

1. 分析方法

コーパス構築にあたり、2.2 節の(3)で示した分析手順を分析項目として、①項省略の頻度とその分布、②1つの節内の項の数、③第1項の文法関係、④第1項の交替指示、⑤第1項の意味的要素として分類した。例えば、(4)の3文17節で構成されている談話を5つの項目に分析すると表2のようになる。

- (4) [CL φ (=1) そのような夢を見た] (S1 [CL1 夜が更けてから] [CL2 φ 目を覚まし] [CL3 φ 思い出さうち] [CL4 私はなによりも色濃く夢の寂しい気持ちをブリかえらせてしまい] [CL5 暗いベッドに φ 横になっていることができなくなった]) (S2 [CL1 私は階段を上って行き⁽⁹⁾] [CL2 [CL3 兄がトイレに通う際] [CL4 φ つまづかぬよう] φ 常夜灯をつけて] [CL5 [CL6 φ1 φ2 狭く開けてある] φ ドアから寝室に入って行ったのだ]) (S3 [CL1 φ 子供の頃いつもそうしていたように] [CL2 [CL3 φ1 φ2 なんとなく抱えていた] 使い古しの毛布で φ 膝を覆うと] [CL4 φ イーヨーのベッドの裾の床に座り込み] [CL5 [CL6 φ 人間の肺の規模を超しているような] φ 音の寝息を聞いていた] (生活)

まず、文の流れに沿ってみていくと、第1文の第1節 (S1CL1)⁽¹⁰⁾では、第1項は「夜」であり、語彙名詞でコード化されており(項目①)、節内の語彙項の数は「1」で(項目②)、文法関係(GR)は自動詞文の主語「S」で、節内の必須項の数は「1」である(項目③)。同一指示性を見ても、左隣りの節(文)の第1項「φ (=1)」とは同一指示ではないので「DS」で(項目④)、意味要素は「無生」と分類する。S1CL2では、第1項が省略されており、復元すると「私」で、文法関係は他動詞の主語「A」、同一指示性は左隣りの第1項「夜」とは異なるので「DS」とする。項目⑤の意味要素は「有生」で「人間」「1人称」⁽¹¹⁾である。同節の第2項「目」は、「O(直接目的語)」⁽¹²⁾「無生」である。

表 2 分類項目

文No.	節No.	埋め込	項	項目① 形式	項目② 項目③			項目④ SS, DS	項目⑤	
					項の数	GR	述部種類		有生性	人称
1	1	—	夜	語彙	1	S	動詞	DS	無生	
	2	—	φ	省略	1	A	動詞	DS	有生	1
			目	語彙		0			無生	
	3	—	φ ₁	省略	0	A	動詞	SS	有生	1
			φ ₂	省略		0			無生	
	4	—	私	代名詞	2	A	動詞	SS	有生	1
気持ち			語彙	0				無生		
5	—	φ	省略	0	S	動詞	SS	有生	1	
2	1	—	私	代名詞	1	S	動詞	SS	有生	1
	2	—	φ	省略	1	A	動詞	SS	有生	1
			常夜灯	語彙		0			無生	
	3	—	兄	語彙	1	S	動詞	DS	有生	3
	4	—	φ	省略	0	S	動詞	SS	有生	3
	5	—	φ	省略	0	S	動詞	SS	有生	1
6	関係節	φ ₁	省略	0	A	動詞	DS	有生	1p	
		φ ₂	省略		0			無生		
3	1	—	φ ₁	省略	0	A	動詞	SS	有生	1
			φ ₂	省略		0			無生	
	2	—	φ	省略	1	A	動詞	SS	有生	1
			膝	語彙		0			無生	
	3	関係節	φ ₁	省略	0	A	動詞	SS	有生	1
			φ ₂	省略		0			無生	
	4	—	φ	省略	0	S	動詞	SS	有生	1
	5	—	φ	省略	1	A	動詞	SS	有生	1
			寝息	語彙		0			無生	
	6	関係節	φ	省略	1	A	動詞	SS	無生	
規模			語彙	0				無生		

次に、各項目の補足説明をすると、項目①では、「省略」「語彙」の他に、(4)のS2CL1の「代名詞」、(5a)CL1の名詞化辞がある。また、(5b)のS2CL1の指示詞などはアノテーション⁽¹³⁾を行っているが、本稿の分析では「その他」に分類している。

(5) a. 彰子ちゃんのお母さんが階段から落ちて死んだとき、[CL1 [最初に見つけ救急車をよんでくれた] のが若い娘さんだった] (火車)

b. (s1 こうした人材を吸収して、幕府約百年間に経済はものすごい勢いで成長した) (s2 [CL1 これが頂点に達した])ののが17世紀の「元禄」といわれる華やかな時代である) (12人)

項目③の文法関係では、「S」「A」「O」の他、(6)の(CL1)は受動態の主語「dS」と分類する¹⁴。

(6) 同年代の子どもをもっているおっさん連中_iばかりが常連客だから [CL1 ϕ_j みんなにかわいがられていた] (火車)

また、(5a)CL1の分裂文を含む名詞文(139例)や(7a)CL1の形容詞文(58例)、および(7b)CL1存在文(69例)は、項目③の文法関係を「S」と分類している。

(7) a. しかしその一方でまったく [CL1 [CL2 歴史上の異民族の存在にふれていない] 中学校歴史教科書も少なくない] (起源)

b. 奥深い例としては、第三部でとりあげる津田左右吉が、一九〇二年に書いた[CL1 中学向けの『国史教科書』がある] (起源)

次に項目④であるが、S3CL3の関係節(「なんとなく抱えていた」)のような埋め込み文の場合、日本語の構造上、同一指示性は左隣りではなく右隣りの節(「使い古しの毛布で ϕ 膝を覆うと」)を参照して同一指示性を決定した。補文の場合も同じように処理した¹⁵。

次に項目⑤は、「有生」で「人間」の場合は人称も分類するが、S2CL6の第1項のように復元した場合、「私」か「私」の家族の可能性がある場合は、1人称複数の意味で「1p」と分類した。

以上の要領で562文1670節を対象に分類を行った。次節では、その結果と考察を述べる。

4. 分析とその結果

4.2. 項省略の頻度とその分布

第1項の省略を指示対象のコード化全体から捉えなおし、どのような条件で、項省略が生起しているかを分析するため、まず、指示対象の形式分布を確認した。表3がその結果である。(8a)のように1節で1文を構成している場合や、(8b)のように複数の節が連続した場合、(8c)のように文を超えた場合を含め、第1項1,670例のうち936例が省略項で現れ、全体の約6割を占めている。

(8) a. その仕方で翌朝[ϕ (=1) 話の続きをした] (生活)

b. そして [CL1 ϕ_i (=3) いろいろ考えた末] [CL2 ϕ_i ある閃きを覚え] [CL3 ϕ_i 42, 43歳で黒柳家の番頭を辞めた] (12人)

c. (s1 若者_iが携帯電話を耳にあて、 ϕ_i さかんに何かしゃべっている) (s2 ϕ_i わざとらしく大声をあげて、 ϕ_i ぞんざいな命令口調でものを言っているところを見ると、いっばし、

φ_i 人を使う立場にいるのだろう)

(火車)

この結果から、日本語の書き言葉の第1項の位置には、内容形態素である語彙形式よりも、機能的で依存度の高い省略という形式が好まれて使用されることがわかる。第1項の情報提供の仕方は、形式と意味が一对一の明確な方法ではなく、他の要素との関係性を内包した情報提供の方法だといえる。

表3 第1項の種類と分布

	項数	割合
省略項	936	56.0%
語彙名詞	546	32.7%
人称代名詞	80	4.8%
名詞化辞他	108	6.5%
合計	1670	100%

4.2 節内の項の数

4.1節では、談話全体の中で第1項の位置に生じやすい形式を確認したが、ここでは述部を中心に、それと共起する項の分布を確認した。

まず、1つの述部に対して、具現化した項の数を確認した。表4が示すように、必須項が1つの自動詞では、項の数が1の場合が多いが、ゼロの場合も4割近くにのぼる。さらに、必須項が2つあるいは3つの他動詞では、項の数が1の場合の頻度(482件で60.0%)が一番高く、項の数がゼロか1の場合は、約8割(640件で79.7%)を占めている。これは、話し言葉のみに適応されるといわれていた「単一語彙項の制約」が、日本語では書き言葉にも適応できることを示している。

「単一語彙項の制約」が機能しているとする、述部1つに対して具現化される項の数は1つで充分ということになり、他動詞か自動詞かという述部の種類の違いは重要な問題ではなくなる。単純に、自動詞の構造を「N1+Vi」、他動詞の構造を「N1+N2+Vt」とし、それぞれの項の形式種類を語彙形式と省略形式で組み合わせを考えると6種類になるが、この単一語彙の制約の下では、他動詞と自動詞の区別はなくなり「語彙+V」と「省略+V」の2種類にまで制限されることになる。これは、他動詞表現であっても、表面上は自動詞表現に近いことを意味し、述部の意味として項を複数要求するはずの他動詞表現であっても省略項が内包されている可能性が高いことを示唆している。また、このように項の数に制限があるということは、状態化(De-transitivization)や動作主の非焦点化(Defocusing of agent)とも密接に関連し、受動構文の問題に関わっていくものと思われる(Shibatani 1985)。

日本語の書き言葉では、「指示と述部」で出来事を表現するときに、理論的に考えられる組み合わせを満遍なく用いるのではなく、述部の種類を問わず「述部と語彙が1つ」か「述部と省略項が1つ(述部のみ)」という2種類の単純な形式を用いる傾向があることがわかった。

表 4 述部と項の数

具現化した項数	他動詞		自動詞	
	節数	割合	節数	割合
0	158	19.7%	338	39.0%
1	482	60.0%	529	61.0%
2	160	19.9%		
3	3	0.4%		
合計	803	100.0%	867	100.0%

4.3. 第1項の文法関係

4.2 節では、指示対象を複数具現化することを避ける傾向があることをみたが、では、文法関係のどの位置がもっとも多いのだろうか。第1項のコード化と文法関係の分布を確認したのが表4である。機能語の名詞化辞や人称代名詞の分析も重要ではあるが、ここでは紙面の都合上、コード化の両極にある省略項と語彙名詞に限定して分析を行った。意味内容も形式も完全な形で情報を伝達することができる語彙名詞と、意味内容はほとんど語彙名詞に近いが形式がそぎ落とされて音声形式のない省略項との対比が重要であると考えたためである。

表5の分析結果をみると、第1項の省略化と語彙化の頻度において、自動詞の主語Sと受動態の主語dSの間に著しい違いを確認することはできない。しかし、他動詞の主語Aに関しては、省略項と語彙名詞の間で顕著な違いがみられ、具現化されるよりも省略されやすいことがわかる。この結果は、カイ2乗検定でも有意差が認められた。他動詞の第1項は、(9)のように具現化される傾向が低く、(10a)や(10b)のように省略される傾向が高いといえる。

(9) [CL1 徳富蘇峰_iは復讐のために軍備拡張を説き] [CL2 内村鑑三_j(=A)はアメリカとの絶交を述べ] (起源)

(10) a. [CL1 通話状態がわるくなったのか] [CL2 若者_iは気短そうに舌打ちをひとつして] [CL3 φ_i(=A)電話のスイッチをきった] (火車)

b. (s₁ 僕は張り紙を出していなかったが、渡辺は二度か三度訪ねて来たこともあり、松の木と泉水を見て[僕の家焼跡だとφ_i(=A)気づいたそうだ]) (s₂ [CL1 しかし焼跡だからφ_i(=A)声をかけることもできないし] [CL2 φ_i(=A)灰を掘るには] [CL3 道具もないし]...) (黒い雨)

談話では、述部1つに対して項がゼロか1の傾向が高く、必須項が複数の他動詞の場合は、主語が省略される傾向にある。以上までをまとめると、第1項の項省略には「単一語彙項の制約」と「他動詞の主語」が関与し、「他動詞の主語」との間には統計的にも相関関係が認められた。

表 5 第 1 項の文法関係

文法関係	省略項		語彙名詞		合計	
	項数	割合	項数	割合	項数	割合
S	359	49.5%	366	50.5%	725	100%
A	528	78.6%	145	21.4%	673	100%
dS	49	58.3%	35	41.7%	84	100%

$\chi^2=126.5$ 、 $pf=2$ 、 $p<.001$

4.4. 第 1 項の交替指示

次に、連続する節間の第 1 項の関係を考察し、機能的要因の関与を確認した。交替指示の概念に従い、隣り合った節の 2 つの第 1 項が同じときは同一指示 (SS)、異なるときは非同一指示 (DS) として分析した。本研究のコーパスでは、第 1 項が前節の第 2 項と同一指示の場合も観察されており、その場合は、目的語と同一指示 (SO) とした。表 6 が示すように、省略項の交替指示は、SS が 62.2% で、DS が 36.8% と同一指示の出現頻度が高い。一方、語彙名詞の場合は、SS が約 3 割で、DS は約 7 割を占めており、省略項と逆の振る舞いを示している。

表 6 第 1 項の交替指示

交替指示	省略項		語彙名詞		合計	
	項数	割合	項数	割合	項数	割合
SS	582	80.3%	143	19.7%	725	100%
DS	344	46.7%	392	53.3%	736	100%
SO	10	47.6%	11	52.4%	21	100%

$\chi^2=178.7$ 、 $pf=2$ 、 $p<.001$

第 1 項が語彙名詞で連続する場合、(11 a) のように非同一指示 (DS) の傾向が高い。(11b) S2CL1 ように前文の S1CL6 とは非同一指示でも省略されることはあるが、(11 c) のように省略項で連続すると同一指示 (SS) の傾向が最も高いという結果が得られた。

- (11) a. 景気_i はますます悪化、世の中の閉塞感_j はいよいよ募った (12 人)
- b. s₁(渡辺がそう思いめぐらしていたところ……[CL₆ 渡辺と高丸_iが総代で広島へ来る]こ
とになったと云う) s₂([CL₁ φ_j(=1) きっと死んでいる] という仮想のもとに、その場に
ありあわせの餅と焼米を持参のお供え物として出発した) (黒い雨)
- c. s₁(貸し金業者のほうでちゃんとそれをチェックしていて、φ_i 押しかけてくる。)
s₂(φ_i 学校の門のところで張っていて、φ_i 登下校する子供を捕まえたり、φ_i 尾行して
φ_i 家を突き止めるようなことさえた。 (火車)

日本語の書き言葉では、連続した指示は、具現化されると非同一指示の可能性が高く、省略できる場合は同一指示の可能性が高いと考えられ、この結果は、統計的にも支持された。

4.5. 第1項の意味的要素

第1項の省略と有生性の相関関係についての調査結果は、表7のとおりである。第1項が省略項の場合、74.0%が有生で26.0%が無生である。一方、語彙名詞の場合、有生が36.8%で、無生が63.2%である。この結果は、統計的にも支持され、省略項と意味属性の有生性の間に相関関係が認められた。第1項の省略は、有生性に動機付けられているといえよう。

表7 第1項と有生性

意味的要素	省略項		語彙名詞		合計	
	項数	割合	項数	割合	項数	割合
有生	693	77.5%	201	22.5%	894	100%
無生	243	41.3%	345	58.7%	588	100%

$$\chi^2=199.7, \text{ pf}=1, \text{ p}<.001$$

具体的には次のような場合である。

- (12) a. s_1 (渡辺_i(=AH)は[CL 中尾さんが炭化した灰土の上に描く] 図面をノートに写し取った) s_2 (ϕ_i その図面を頼りにして途中何度も ϕ_i 人に教わりながら山本駅まで ϕ_i 歩きそこから電車で古市に ϕ_i 来て会社で ϕ_i この家を教わった) (黒い雨)
- b. s_1 (私_i(=AH)はまずアメリカの豊富な物資に目を奪われ、また、明るく自由に振舞うアメリカ人に深く ϕ_i 関心したものである) s_2 (それと同時に、私自身の考え方や感じ方_jがアメリカ人と異なることからくるぎこちなさもおりにふれて ϕ_i 感ずるようになった) s_3 (例えば、 ϕ_i 渡米して最初の頃だったと ϕ_i 思うが、L日本の知人に ϕ_i 紹介された人を ϕ_i 訪ねてしばらく ϕ_i 話をしていると、「あなたはお腹がすいているか、アイスクリームがあるのだが」と ϕ_i 聞かれた) (甘え)

(12a)の第2文の省略項が指示しているのは前文の「渡辺」で、意味属性は「有生」かつ「人間」である。また、(12b)の第2文にある「私の考え方や感じ方」のように、意味属性が「無生」の場合は語彙名詞で生起しているが、指示対象が「私」の場合は、第2文から第3文にかけて8例が省略項で生起している。

有生の第1項の特徴をさらに詳しく観察すると、表8のような結果が得られた。省略項のうち、1人称は242例で34.9%、2人称は該当例がなく、3人称は451例で65.1%である。一方、人称代名詞は、1人称は65例の81.3%、2人称は該当例がなく、3人称は15例で18.7%ある。具体的な例を以下に示す。

- (13) a. s_1 (私_iがお嫁に行くならね……) s_2 (ϕ_i そこで静かな生活がしたい) s_3 ([CL₁ ϕ_i 口をつぐんですぐ][CL₂[CL₃ 父と母_jとがそれぞれショックを受けた] のが ϕ_i わかった]) (生活)
- b. [CL₁ ϕ_i (=3) 考えるうちに][CL₂ ϕ_i 関根彰子の経歴を照会した折][CL₃ ϕ_i 溝口法律事務所の澤木事務員と話し合った][CL₄ ことを ϕ_i 思い出した] (火車)

表 8 第 1 項の省略と人称

人称	省略項	割合	代名詞	割合	合計
1 人称	242	34.9%	65	81.3%	307
2 人称	0	0.0%	0	0.0%	0
3 人称	451	65.1%	15	18.7%	466
合計	693	100%	80	100%	

$$\chi^2=64.3, \text{ pf}=2, \text{ p}<.001$$

(13a)の S2 の省略項は S1 と同一指示の「私」を指示しており、その後、S3 の第 1 項へと連続していくが、そのときの形式は省略項である。さらに、省略項で次の節の第 1 項へと引き継がれている。(13b)の第 1 節の省略項は「本間」という主人公を指示している。

本稿のデータでは、省略項内の割合としては、(13b)のような第 1 項が有生かつ人間で、3 人称の例が多く、人称代名詞との関係を確認すると、両者には相関が認められ、省略項は 3 人称の傾向が高い。しかし、人称と項の 3 形式を確認すると表 9 のようになり、省略項は 1 人称の傾向が高く、第 1 項の 3 形式と人称の間に相関が認められた。

以上、4.4 節と 4.5 節の結果をまとめると、第 1 項の項省略には「同一指示性」と「有生性」、特に「有生/人間」「1 人称」が関与していることが判明し、統計的な相関関係も認められた。

表 9 省略項と人称

人称	省略		語彙		代名詞		合計	
1 人称	242	77.8%	4 ¹⁶	1.3%	65	20.9%	311	100%
3 人称	451	68.0%	197	29.7%	15	2.3%	663	100%

$$\chi^2=175.3, \text{ pf}=2, \text{ p}<.001$$

5. おわりに

以上、談話内での第 1 項の振る舞いを名詞句の同一指示性の識別という観点から分析し、項省略を項のコード化全体の中で捉えなおしてきた。さらに独自で構築したコーパスにより、これまで項省略の研究ではあまり行われていなかった多角的な計量的分析を行うことができた。その結果、第 1 項の省略が生起しやすい条件を (13) のように限定することができ、(13b - d) については先行研究では言及されなかった数量的相関も示すことができた。

- (13) a. 単一語彙項の制約
 b. 他動詞の主語
 c. 同一指示性
 d. 有生性/人間・1 人称

本研究の結果から、第 1 項の省略には、「単一語彙項の制約」、「他動詞の主語」、「同一指示性」、「有生/人間・1 人称」の 4 要因が、動機付けとして大きな役割を果たしているということが明らかに

なった。特に、(13a)の制約は、これまで話し言葉にのみ適用できるとされていたが、本研究の結果、日本語の書き言葉にも適応できることがわかり、この制約の汎用性の高さを支持することができたと思われる。

項省略の解釈には多様な要因が関与しており、体系的に整理するには、それぞれの要因を細かく検証すると共に、項全体のコード化を視野にいれた包括的な検証が必要になる。今回、本稿が提案した「名詞句の同一指示性の識別」という観点とそれに基づく数量的データ分析は、項省略の全体像の把握、さらには、項のコード化の体系化に向けて有益な試案になるのではないかと考えている。

今後は、述部の意味と項省略との関係、第1項と第2項との関係、さらに、指示的距離との関係など名詞句の同一指示性の識別に関与すると思われる要因を検証し、項のコード化の条件を整理していきたい。

注

- (1) 第1項とは、おおむね主語と同義である。ただし、「太郎が/に英語がわかる」などのように他動性の低い場合に格標示と文法関係にズレがおきるときは「太郎」を第1項とする。本稿でいう第1項とは、「述語が要求する項が欠けている場合に、その中心的役割を果たす項」という意味であり、Van Valin and LaPolla (1997)が「構文のなかで特権的な文法機能を担っている統語的な項」と定義する「軸語 (pivot)」（Van Valin & LaPolla 1997: 275)に相当する。
- (2) 略語: 1 (1人称)、3 (3人称)、AH (有生/人間)
- (3) “reference tracking”の訳語として「参与者追跡システム」(山田 1996)と「名詞句の同一指示性の識別」(大堀 2002)がある。本研究では節連続において省略項の同定がどのような方略で実現されているかを検証することを目的としており、その目的が訳語に反映されていると思われる後者の訳語を採用した。
- (4) 本稿の言語データの量は、出版物一冊に対し2,000~4,000字程度を目安に、6冊全体で24,544字・1,670節・562文である。出典は、井伏鱒二 (1995)『黒い雨』新潮社、大江健三郎 (1995)『静かな生活』講談社 / (1998) *A quiet life*. Picador、小熊英二 (1995)『単一民族神話の起源: 「日本人」の自画像の系譜』新 曜社、堺屋太一; ジャイルズ・マリー訳 (2003)『日本を創った12人: 対訳』講談社インターナショナル、土 居健郎 (1980)『甘えの構造』弘文堂、宮部みゆき (1998)『火車』新潮社。
- (5) 角括弧で囲まれた部分が節でCLと番号で示し、丸括弧で囲まれた部分は文でSと番号で示している。節や文を明確に示すときに使用する。
- (6) 交替指示とは、次のような例 (Mojave 語) のことである (Munro 1979:145).
 - a. ya-isvar-k, iima-k.
when-sing-SS, dance-PAST
'When X sang, X danced.'
 - b. naya-isvar-m, iima-k
when-sing-DS, dance-PAST
'When X sang, Y danced.'同一主語への指示はSS、異なる主語はDSで標示される。(a)と(b)それぞれの文における述部(「sang」と「dance」)の主語は出現していないが、主語が同一であるかそうでないかをそれぞれ-kと-mが標示している。
- (7) 項省略には、隣接する節間の情報だけでなく指示距離などマクロの情報構造が関与していると思われるが、本稿は談話の中心的単位・節がまずどのような振る舞いをするかを確認するものであり、本稿では指示距離と省略項

の関連は取り扱わない。本稿で使用したコーパスの結果（文内指示 476 例、文を超えた 359 例）に関しては別の機会に検証したい。

- (8) 3.2 節で説明するコーパスの項目にこの(3)にある 5つの項目が必要になる。詳細は 3.2 節を参照されたい。
- (9) 『計算機用日本語基本動詞辞書 IPAL』(1987:29) に従い、「山を歩く」などの移動動詞は自動とした。
- (10) 角括弧は節 [CL]、丸括弧 (S) は文を示す。必要と思われるところに記載した。第 1 文の第 1 節 (S1CL1) に先行する文が記載されているのは、S1CL1 の第 1 項「夜」の非同源性を説明する上で必要なためである。
- (11) 本研究で使用している「人称代名詞」について補足しておく。日本語 3 人称代名詞（彼 (かれ)）などは指示詞に語源をもち「人間」のみを指示するもので、英語の 3 人称代名詞「it」のように「非人間」を指示することはない。ここで「人称代名詞」と呼ぶときは「1・2 人称」と「3 人称・人間」を意味している。本研究では、「それ」などは「指示詞」、「その人」などは「語彙名詞」として分類している。
- (12) 本稿は第 1 項の振り舞いを分析対象としており、直接目的語 (O) や間接目的語の分析は別の機会に検証する。
- (13) アノテーション (annotation) とは、コーパスを幅広く活用することを目的とし、コーパスデータに付けられた言語額的情報や注釈のことである。
- (14) Role and Reference Grammar が定義する項の文法関係 (grammatical relations) の分類に従う。Van Valin & LaPolla (1997) などを参照されたい。
- (15) 主節 S3CL2 と関係節 S3CL3（「 ϕ 1 ϕ 2 なんとなく抱えていた 使い古しの毛布で ϕ 膝を覆うと」）の場合、関係節内の第 1 項（省略）は後続する主節の第 1 項を参照しその同一指示性を判断している。本研究の目的は、節連続において第 1 項がどのようにコード化されるかということに着眼しているため、関係節、主節の各節の項構造からみて第 1 項同士がどのような関係を保っているかということが重要であり、関係節の主要部が主節の中でどのような位置にあるのか、ということは考慮にいれていない。
- (16) 「日本人」などは 3 人称であるが、作者あるいは登場人物が自分を含めて「日本人」「日本民族」と言及している場合には 1 人称として分類した。

参考文献

- 大堀壽夫 (2002) 「交替指示」構文の通時相 統語変化とカテゴリー化, 『認知言語学Ⅱ:カテゴリー化』 pp.297-321, 東京大学出版.
- 久野暲 (1983) 『新日本文法研究』大修館書店.
- 情報処理振興事業協会技術センター (1987) 『計算機用日本語基本動詞辞書 IPAL(basic verbs)』. 情報処理振興事業協会技術センター
- 砂川有里子 (2005) 『文法と談話の接点』くろしお出版.
- ベケシュ・アンドレイ (Bekeš, Andrej) (1995) 「文脈から見た主題化と「ハ」」益岡隆志他編『日本語の主語と取り立て』 pp.155-173, くろしお出版.
- 山田敏弘 (1996) 「日本語の参与者追跡システムについて (1)」『現代日本語研究 3』, pp.93-114, 大阪大学出版.
- Comrie, Bernard (1989) Some general properties of reference-tracking systems. In Arnold, D. et al. (eds.) *Essays on grammatical theory and universal grammar*. pp.37-51. Oxford: Clarendon.
- Du Bois, John W (1987) The discourse basis of ergativity. *Language* 63:4. pp.805-855.
- Fry, John (2003) *Ellipsis and Wa-marking in Japanese conversation*. New York/London: Routledge.
- Kennedy, Graeme. 1998. *An Introduction to Corpus linguistics*. London: Longman.
- Munro, Pamela (1979) On the syntactic status of switch reference clauses: The special case of Mojave comitatives. In Munro (ed.). *Studies of switch-reference*. UCLA Papers in Syntax. 8.
- Nariyama, Shigeko (2003) *Ellipsis and reference tracking in Japanese*. Amsterdam/Philadelphia: John

Benjamins.

Shibatani, Masayoshi (1985) Passives and related construction: A prototype analysis. *Language* 61.4:81-848.

Van Valin, Robert D. and Randy J. LaPolla (1997) *Syntax: structure, meaning, and function*. Cambridge: Cambridge University Press.